

# こども新聞 野田に元気

## 児童らが取材、創刊

群馬の「仲間」仮設住宅に笑顔  
編集に協力

野田村の小中学生が記者をする「こども新聞社」が発行する初めての新聞が2日、同村の仮設住宅で配られた。子どもの目線から地域を元気づけようと同村で活動するボランティアグループが企画し、新聞づくりが活発な群馬県桐生市の境野小が製作に協力した。同校からも児童1人が駆け付け、出来上がった新聞を一緒に配った。

こども新聞社は、ボは全国から寄贈された。チームともだちのメンバーが縁のある境野小に協力を呼び掛け、学校新聞製作で実績のある同校児童がこども記者たちの記事や写真を編集した。新聞はB4判表裏4ページ。1面は「笑顔もお店も戻ってきたよ！」の見出しで、津波で被災したまるきんが再開した際のにぎわいを伝える。2面は「広がれ！新聞作りの輪」の見出しで新聞を協力して作ることの大切さが書かれ、野田村との交流が続くよう群馬県や桐生市の紹介も盛り込んだ。

2日はこども新聞社のメンバー6人と境野小5年の松平雅楽君が、野田中の仮設住宅で新聞を配布。泉沢陽菜さん(野田小4年)は「人の話を聞いて書くのが楽しい」、佐々木真悠さん(同)は「写真を撮るのが好き」と、新聞の感想や村の魅力などを取材していた。

大沢マツ子さん(70)は「孫のような子どもたちに声を掛けられるとうれしい」と目を細めていた。松平君は「本当は暗い気持ちがあるのだからけど皆、明るく振る舞っていた。野田の人たちの優しさを感じた」と話した。

登内代表(44)は「子どもが中心の活動をする中で、未来を見て話を進め地域を元気づけたい」と意気込んでいた。

野田村の魅力などを取材する泉沢陽菜さん(中央)と佐々木真悠さん(右)



野田村の小中学生と境野小が協力して製作した新聞

